

— 玦飾に関する新資料の紹介 —

細辻 嘉門

(埋蔵文化財センター主任学芸員)

1 遺跡の概要

平岡遺跡（図 1）は、富山市西部に位置し、呉羽山丘陵南端から続く河岸段丘上に立地する旧石器・縄文・奈良・平安時代の集落遺跡である。遺構の分布が確認された場所の標高は 60m 前後である。

遺跡は、昭和 26 年発行の森秀雄著『大昔の富山県』に既に登載されており、古くから縄文時代の遺跡として知られ、多くの研究者が表面採集に訪れている。

採集品には、ていねいに加工された石鏃・石錐・石匙などの石器や、玦飾・管玉などの装飾品がある。

石鏃は栗山邦二氏の採集品だけで 1,000 点以上あり、県下でも最多である。

玦飾などの装飾品は 100 個程度採集されているが、原石や未製品が見られないことから、平岡遺跡以外の場所で製作され、運び込まれたものと推測されている（婦中町 1996）。

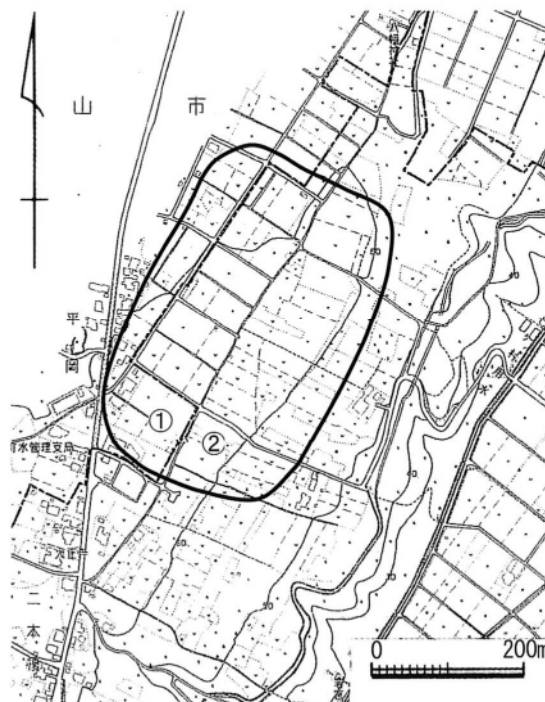


図 1 遺跡位置図・遺物出土位置図（1/10000）

2 出土遺物の概要

紹介する出土遺物は 2 点ある。

1（図 2 左・写真 1・2）は、平成 21 年度に実施した県道新設工事に先立つ試掘調査の際、35 トレンチの茶褐色土排土から出土した。

完形品で、大きさは全長 6.7 cm・最も広い部分の幅 2.7 cm・厚さ 0.6 cm、重量は 19 g である。

下に向かって広がる縦長の二等辺三角形で、磨製石斧のようなプロポーションである。日本鋏に例えられる場合もある。上部に孔を穿ち、孔から下端部にわたって中央に切れ目がある。側面にも明確に面を形成している。

縦断面形は、中央よりやや下端部側で最大厚をとり、上下端部に向かって緩やかに薄くなる。下端部は磨製石斧の刃先のように鋭くなっている。横断面形は、中央部で最大厚をとり、両側面に向かって緩やかに薄くなる。

孔は上方に偏っており、大きさは 5 mm 前後である。表裏両方向から穿孔されている。

孔壁と孔の周囲には擦痕が円を描くように残っており、穿孔具の連続回転運動によって穿孔されている。孔上部の擦痕は、若干不明瞭である。

切れ目は、断面 V 字状を呈し、孔に接した部分が最も浅く、下端部に向かうにしたがって深くなっていく。孔を穿った後、長軸方向への擦り切りによって形成されている。孔の上部には、切れ目を擦り切る際についた傷が残っている。

片面には原石の自然面が残っているが、全体を磨いて仕上げられており、表面全体は滑らかである。色調はやや緑がかった白色である。石材は蛇紋岩とみられる。

同じ茶褐色土から羽状縄文を施した土器が出土しており、帰属する時期は縄文時代前期後葉～末葉に比定される。

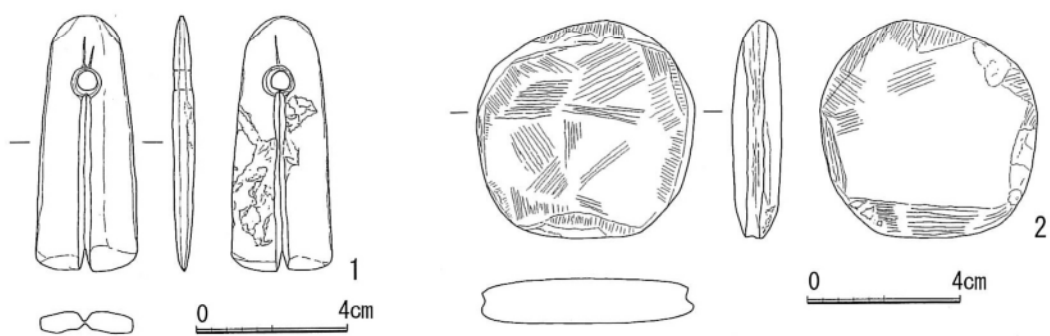


図2 玦飾型垂飾(1)、玦飾未製品(2)実測図 (S=1/2)

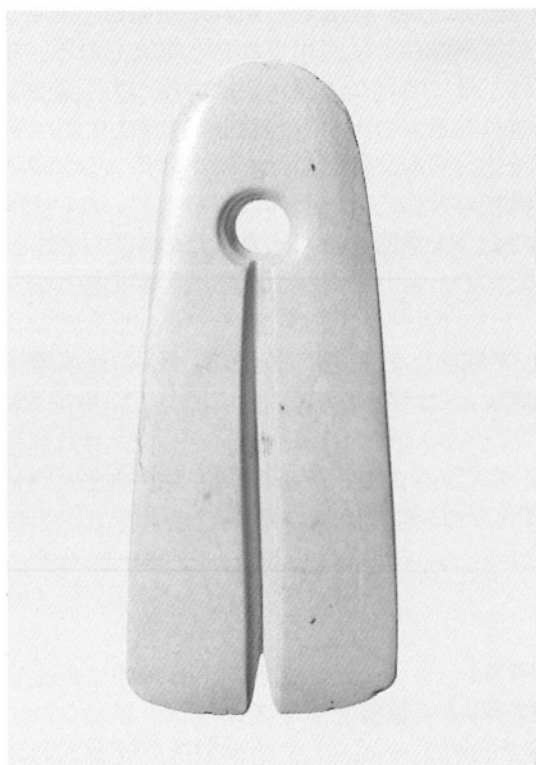


写真1 1の表面

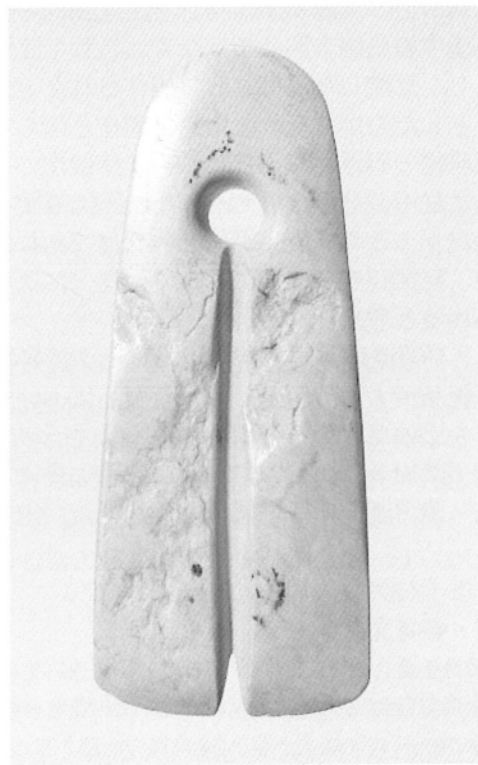


写真2 1の裏面



写真3 2の表面



写真4 2の裏面

2 (図2右・写真3・4) は、平成15年度に実施した試掘調査の際、26トレンチ排土から出土した。大きさは直径5.7cm・厚さ1.2cm、重量は70gである。いびつな円形で、側面には溝が巡る。断面形は、全体にほぼ同じ厚さであるが、中央でわずかに最大厚となる。

表面全体には擦痕を残し、全体に磨き上げられている。擦痕の方向は一定ではない。

側面の溝は、断面は緩やかなV字状で全周する。一部分は側面から表面に外れており、螺旋状に施溝されているようにも見える。擦り切り技法で施溝されたと考えられる (1)。

色調は暗い白色に緑色が不規則に斑状に入っている。石材は蛇紋岩とみられる。

26トレンチからは蜆ヶ森Ⅱ式や福浦上層Ⅰ式に比定される土器が出土しており、帰属する時期は縄文時代前期後～末葉に比定される。

3 若干の考察

1 は玦飾型の垂飾と考えられる。孔上部の擦痕の不明瞭さが、紐などと擦れたためとすると、切れ目が途中の玦飾未製品ではなく、これで完成品として垂飾などに使用されたと考えられる。玦飾のかたちを意識した垂飾として製作されたと推測され、身に着けた人は、玦飾の持つ力を垂飾にも得ようとしたのか、それとも玦飾製作と何らかの関連がある人なのかもしれない。

2 は玦飾の石材と考えられる。玦飾製作の初期段階で、円形に加工した石材を薄くスライスしようとした途中のものと考えられる。平岡遺跡では、現在のところ玦飾製作は行われていないと考えられており、この石製品が玦飾の石材であれば、どのような意図で持ち込まれたのか興味深い。

今後、発掘調査の進展によって、過去に採集されたものと合わせて、これら石製品の持つ意味が解明されると考えられる。

また、平岡遺跡と同時期に営まれた小竹貝塚では、平成20・21年度の調査で、貝塚から石製装飾品や未製品が大量に出土した。石製品について、組成などの研究が進むことによって、平岡遺跡の遺物との比較が行えると期待される。

今回、遺物全般について、藤田富士夫氏にご指導いただいた。図の作成には、秋葉保香氏・小林高太氏・蓮沼優介氏にご協力いただいた。記して感謝いたします。

<註>

(1) 鄧聰氏 (香港中文大学) のご教示による。

<引用・参考文献>

朝日町教育委員会 2003『富山県朝日町 柳田遺跡発掘調査報告書』

朝日町教育委員会 2005『富山県朝日町 柳田遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

小島俊彰 2008「蜆ヶ森式土器」『総覧縄文土器』アム・プロモーション

高橋修宏 1982「第7章考察とまとめ 第1節 北陸縄文前期後・末葉土器編年の再考」『小泉遺跡』

大門町教育委員会

田中昌樹 2002「岩坪岡田島遺跡出土の縄文土器 —「蜆ヶ森式土器」・「朝日下層式土器」の新資料の紹介—」『富山考古学研究』紀要 第5号 財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

樋口清之 1933「玦状耳飾考」『考古学雑誌』第23巻第1号・第2号 考古学会

藤田富士夫 1978「V 2. 石器」『富山県滑川市安田古宮遺跡発掘調査報告書』滑川市史 考古編 滑川市

藤田富士夫 1983b「5 玦状耳飾」『縄文文化の研究 7 道具と技術』雄山閣出版株式会社

藤田富士夫 1983a「玦状耳飾の編年に関する一試論 —特に北陸及びその周辺を中心として—」『北陸の考古学』

石川考古学研究会々誌 第26号 石川考古学研究会

藤田富士夫 1989『玉』考古学ライブラリー52 ニューサイエンス社

婦中町 1996『婦中町史 通史編』

婦中町 1997『婦中町史 資料編』

町田賢一 2007「第Ⅵ章 考察 1 岩坪岡田島遺跡の縄文時代 —富山県における縄文時代前期のあり方—」『岩坪岡田島遺跡・手洗野赤浦遺跡・近世北陸道遺跡発掘調査報告』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所